

ラマルチーヌ『ジロンド派の歴史』執筆のころ
(1843-47年)……その書簡を中心に
Lamartine of the days in which *Histoire des Girondins* was
written — viewed from his correspondences

大野 一 道
OHNO Kazumichi

詩人として盛名を馳せていたアルフォンス・ド・ラマルチーヌ(1790-1869)には多様な顔があって、外交官としてキャリアを積んだあと政界に進出、やがて1848年の二月革命で、臨時革命政府の実質的責任者として活躍するもあつという間に失脚、不遇な晩年を送ったという政治家としての顔のほかに、『ジロンド派の歴史』(1847)をはじめとする歴史書をいくつも書いたり、郷里マコン周辺のぶどう園の所有者として、その経営に日々苦勞したりもしていた。

こういった彼の生活全般を知り、その人となりや肉声といったものを感じとるのに、『書簡集』はかっこうの手がかりを与えてくれる。書簡の中には、そのときどきの関心事が、さほど潤色されることなく素直に表明される場合が多いからである。

彼の書簡集はその死後に姪のヴァランチーヌによって出されたものを初め、これまで多くの版が出ている。が断片的なもの(たとえばある特定の相手とのやり取りのみ)が多く、ある時代の彼の交流全体を示すようなものはほとんど無かった。ところが2000年になってパリのオノレ・シャンプイオン社から、1830年以降の書簡に限られているものの体系的『書簡集』が出版され始めた。クレルモン＝フェランにあるブレーズ・パスカル大学のクリスティアン・クロワジュー教授の編になるもので、手紙をやり取りした相手側のものも収め、その時々状況を詳しく解説した本格的なものである¹⁾。

そこで今回は、このクロワジュー版の『書簡集』のIV(1842-1846)とV(1847-1849)の二冊を中心に、当時のラマルチーヌがもっとも関心をよせていたフランス革命研究(具体的には『ジロンド派の歴史』執筆)がいかなる理由や経緯によって書かれたのか、そしてそれがどのような反響を呼んだのか等を眺めてみたい。

I

政治家ラマルチーヌの歩みを眺めるとき、1843年という年が大きな転換点として位置づけられるだろう。10年前からすでに代議士となっていたが、時の7月王制政府に対しては、どの党派に属することもなく、つねに是々非々の立場をとっていた。ところがこの43年の年頭議会で、彼は、議会開会にあたってルイ・フィリップ王が寄せた勅語に対する奉答を、議会としていかなる内容のものにするかをめぐって発言し、自分が反政府の側に立つと表明してしまうのである。「悪は、私の目から見ると、内閣にあるものではありません。(・・・)状況の困難さは、危機の重大さは他にあります。それらはシステム全体にあるのです²⁾と発言する。つまり内閣の個々の政策以前のこととして社会全体のシステム(おそらく体制とほぼ似た意味で

¹⁾ *Correspondance d'Alphonse de Lamartine (1830-1867)*, publié par Christian Croisille (Honoré Champion). これまでに Tome I, II (2000), III, IV (2001), V (2002), VI, VII (2003) が出ている。

使っているのだろう)に悪はあるというのだ。つまり何か失政があった場合、それを犯した内閣をとり代えればすむといったことではなく、今日の社会体制そのものを変革しなければ、政治的過ちが是正されるのは無理であろうと認識したということなのである。そして彼は、そうした状況すべては1789年の革命を犯罪とみなし、王家と貴族階級の利益を優先させている権威主義的あり方に起因していると断じる。こうして彼は自らの政治的立場を鮮明にしたが、だからといって野党側のどの党に属することもなく、これ以降も独立の姿勢を貫く。

ところで上に引用した演説は1月27日になされたものだが翌々日の29日、ジョルジュ・サンドから次のような手紙が来る。

「あなたが野党側の(・・・)真のリーダーとなられるのかどうか知りませんが、野党陣営では多くの虚栄や無経験からくる闘争と心配事があなたを狙い打ちしているでしょう。(・・・)だがそうした党派を超えて、民衆がいます。そしてあなたはまっすぐに人類の方に向かうのです。」³⁾

サンドは政治家として、いまだ百戦錬磨とまではいかないラマルチーヌが、これからどれほど苦勞することになるかと思いやりながら、彼が民衆と人類のために、決然と働いてくれることを期待し励ましているのである。

同じ年の6月4日、郷里マコンで市主催のラマルチーヌ歓迎式典が開かれた。その席で彼は次のような演説をした。

「わたしは思うのですが、ここに集まっているみなさんすべて、土地所有者から労働者まで、それも手を使う労働で生きている人から知的労働で生きている人まで、すべての方がそれぞれの利益を、安心し不安もなく、お互いの中で嫉妬することもなく、私の手にゆだねてくださったのは何故だろうか。(・・・)それは89年の革命が、同じ祖国にいるわれわれを3つないし4つの民に分けていたあれらの障害ぜんぶを、取り払ってくれたからです。そして今日、万人の間の権利の平等が、それが生み出すにちがいがなかったものを生み出したからです。つまり皆が同一の祖国愛をもち、あらゆるものの利益を共通の利益の中に溶け込ませるということになったのです。」⁴⁾

89年の革命が、始めて諸階級を超えた国民という意識を生み出したのであり、この国民の間に生まれた権利の平等意識が、共に同胞として支えあおうという友愛(これはキリスト教的原理であると彼は言っている)を生み出すことにもなる。それゆえ、そうした原理によって国民全体に奉仕するのが政治の役割となるべきだと彼は主張する。

「ところで、7月革命政府の唯一の誤りは(・・・)その諸制度が小さく、あまりにも狭すぎて、民衆 [=国民] 全体がそこに入り込めないという点にあります! 諸制度は現

²⁾ Alphonse de Lamartine, *La Politique et l'Histoire* [以下 P. H. と略す] présenté par Renée David (Imprimerie Nationale, 1993) p. 175

³⁾ *Correspondance*, Tome IV [以下 C. IV と略す], p. 179

⁴⁾ P. H., p. 192

在のモデルにではなく、過去のモデルにもとづいて作られているのです。ところがです！民衆の現在および未来における基本的な思考とは何でしょうか？ただ一言で言えるもの、つまり民主主義です。』⁵⁾

政府の形態を民主主義的なものに改めること。それは89年から始まった「現在のモデル」にもとづくものに、それを改変するというに他ならない。この民主主義を、下の方の階級による独裁的支配権の確立と取りちがえてはならないだろう。大革命のある段階ではそういったすりかえが行われて、1793年のような大変な悲劇が生じた。あくまでも社会の全構成員が平等の権利をもって、共に手をたずさえてよりよい社会をめざすというのが民主主義でなければならない。これがラマルチャーヌの考えとなる。

「民主主義ということで、この政府が上から下へ落ちてきたと理解するのですか？ 公的仕事にもっとも貢献できる能力を持った、余暇と気高さと財産のある階級から引き剥がされ、(・・・)地面に一番近いところにいる、普遍的思考にもっとも慣らされていない階級へと移されたと理解するのですか？(・・・)それこそデマゴギーでしょう。(・・・)政治的社会はあるべきもの、つまり一なるものとしてあるのです。頭はつねに頭となるでしょう。頭を切り取られた国民には災いあれ！われわれが望みかつ理解するのは、民主主義とは頭と胴体と手足から、つまり国家のあらゆる勢力から構成されているということです。過去の思い出と名誉をもつ貴族階級から(・・・)、活動的で知的で土地等を所有する中産階級から(・・・)、そして最後に、大衆と呼ばれる働く人々のおびただしい階級から、構成されるのです。(・・・)一言で言って、われわれは民主主義を、国民、一にして分割不能な完璧なる国民の意味で使っています！その他は一時的な不吉な反動でしかないでしょう。89年のすぐあとの何年間かにあったようなものです。専制政治を移行させたものであって自由ではありません。上の方の専制政治に取って代わった下の方のそれだったのです。上でも下でも真ん中でも、専制政治などわれわれは欲しません。いたるところに権利を、万人に自由を、それがわれわれにとっての民主主義です！」⁶⁾

この演説の中に、当時の彼の政治思想すべてが表明されたと言える。

こうして大革命への関心は彼にあって、いやがうえにも高まらざるをえなかった。ほどなく彼は、フランス革命そのものをふり返って研究しようという気になるはずだが、その前にこのマコン市の演説をめぐる反応を書簡から見ておこう。

翌日の6月5日、友人エメ＝マルタンに次のように書いている。

「民衆 [=国民] と民主主義の統一という私の考えを展開してゆくと、2時間のあいだに100回も大変な拍手喝采を受けました。まるで聖ベルナルが大衆に話しているときみたいでした。」⁷⁾

⁵⁾ *ibid.*, p. 195

⁶⁾ *ibid.*, p. 196-197

⁷⁾ C. IV, p. 234

中世の大聖人となぞらえてひどく満悦している様子が伺える。もっともこれを、ラマルチーヌの誇大妄想として片づけてしまい切れない面もある。

というのは彼のフランス革命観の根底には、これが古いキリスト教的世界観に代る新しい世界観の夜明けを告げる、一種宗教的大事件であったという認識があるからである。

ところで上に引用した手紙の終りの方には「借りている6万フランに関してはできる限り返済を延ばしてほしい」という懇願の言葉も見える。公的面での栄光と私的面での借金生活というのが当時の彼の状況だった。

ところで6月10日ミシュレから次のような手紙がくる。

「これはわれわれの政治的福音書となります。(・・・)あなたこそわれわれが待ち望んでいた人です。(・・・)私はあなたと友情と希望において、しっかりと一体化しているのを感じます。」⁸⁾

これに対しラマルチーヌは次のように答える。

「宗教問題はあらゆる歴史と哲学の根底に存在していますが、それと同様、現実の政治問題すべての根底にもあるのです。(・・・)私たち二人は、理性が信仰となり、信仰心が理性的なものとなる近代の寺院を建てる者となりましょう。二人して手から手へ石とセメントを手渡していきましょう。」⁹⁾

この瞬間ラマルチーヌとミシュレは、たしかに接近していた。歴史と政治に対しほとんど共通の姿勢をもっていたと言えるかもしれない。

しかし、共にフランス大革命を学んでゆくに従い、彼らの資質の違いは如実に露呈してくるだろう。

ラマルチーヌはどういう形で、その革命研究を始めるのか。

II

8月5日、彼は自分の財政状態を立ち直らせるため「メスを入れようと思う。第一にすべての馬を売る。第二にまずミイーを売りに出す。第三に叔母が長くはないだろうから、死んだら彼女の土地とサン＝ボワンを売ろうと思う」¹⁰⁾とルイ・エメ＝マルタン宛に書いている。ミイーとサン＝ボワンには、ともに彼が父から相続した土地（および城館）があった。叔母というのは当時87歳の父の妹シュザンヌで、死ねばかなりの遺産が彼のもとに入るはずであった。この叔母は高齢とはいえ、この時はまだ元気だったらしく（3年後には亡くなるが）政治にも関心があって、もちろん王党派だったから甥が野党側に走ったことを大変残念がっていたという。

ラマルチーヌは大好きな乗馬もあきらめ、愛着深い土地も手放そう（もちろんその前に当時は無給だった代議士職を辞し、政治活動のために所有していたパリのアパルトマンも売ろう）と考えたらしい。

⁸⁾ *ibid.*, p. 237

⁹⁾ *ibid.*, p. 244-245

¹⁰⁾ *ibid.*, p. 284

それほど借金に追われる生活となっていたのである¹¹⁾。こうした生活から根本的に脱却しようと真剣に考え、上記のような手紙を書いたのであろうが、要は、借りた金を返せるほどに金を稼げばいいのである。生活を切りつめるのは、収入の増大が見込めなくなってからでいいと、どうもそう考えたらしい。

ところでラマルチーヌの収入は、自分の所有しているマコン周辺のいくつかの土地からのもの（土地の大部分はぶどう畑だから、現実にはワインの売り上げによる）、および文筆活動からのものの2種類だった。郷里のぶどうの出来具合についてはいつも気にしていて、政治活動のため秋から翌年春にかけて毎年パリに出ていたが、その間必ず問い合わせをしている。この1843年にも、たとえば4月24日、姪のヴァランチーヌに「ぶどう（ミイーとモンソーの）の芽の正確な状態について、注意深く調べさせてくれ」¹²⁾と書いている。ぶどう園経営こそ、なりわいという意味では、ラマルチーヌの本業だったとも言える。

ただしこの稼業は、その時々気候状態に大きく左右されるもので、収入の見通しとしては不安定にならざるを得なかった。

詩人としての名声をすでに確立していた彼には、もう一つ文筆活動によって金を得るという道があった。『冥想詩集』（1820）をはじめとする彼の作品は、当時としては驚異的に売れたらしい。この43年当時には若い日々の思い出をつづった『打ち明け話』（その中には、イタリアでの恋愛体験を小説化したものをも含む予定であった）を執筆していた。しかしこうした回想録ないし小説といったものが、どれくらい売れるかは分からなかった。むしろ彼自身も火つけ役の一人になっていた89年の大革命への関心が大いに高まっていて、その歴史を書く方がよほど好感を呼ぶのではないかと思われたらしいのである。

そうした活動の一環でもあったろうか、この年夏、かねてから計画していた自分の雑誌「ビヤン・ピュブリック」を発刊する。その第一号は8月10日に出るが、それに載せるため編集長に送るという形をとった公開書簡が7日に書かれている。そこには次のような文面がある。

「今日フランスで反対派[=野党]は何を体現しているのか。1789年以来、反対派がつねに体現したものを体現しているのだとわれわれは思う。つまりフランス革命の真の方向性を、である。革命が示したこの方向性は、革命以降、それに続いた諸政府によってここ50年来代る代るゆがめられ、誇張され、あるいは裏切られてきた。（・・・）それに対し反対派と呼ばれたものは何を望んだのか？（・・・）フランス革命の真の方向、つまり法による民衆の支配、多数をなす者の真摯な働きによる公的理性の勝利である。」¹³⁾

反対派の立場を選んだラマルチーヌが、なぜフランス革命の再評価を試みなければならないかが、宣言されているとみてもよいだろう。彼はフランス革命の歴史を、その政治的立場からしてもう一度見直す必要を感じていたのである。しかも歴史書の方が売れるかもしれないと期待できるとすれば、今書いている自伝まがいの作品よりも、まず革命史の方を執筆すべきではないのか？

8月10日エメ＝マルタンへ。

¹¹⁾ 彼がなぜそんなにまで借金生活を強いられるようになったのかは、ここでは詮索しない。

¹²⁾ C. IV, p. 220

¹³⁾ *ibid.*, p. 290-291

「9月1日にわたしの歴史の方に取りかかります。(・・・)『打ち明け話』は中断します。」¹⁴⁾

実際には8月12日に『ジロンド派の歴史』を書き出したらしいが、同15日同じくエメ＝マルタンへ、他の仕事があるから研究というのは時間がかかるからゆっくりと行く他ないと書いている。エメ＝マルタンは、フランス革命全体に関する膨大な著作をものにするようラマルチヌに勧めていたらしく、『ジロンド派・・・』は、その一部をなすものとして構想されたらしい。

9月3日、友人ジャン＝マリー・ダルゴーへ。

「全体で7巻の形で『ジロンド派』を引き渡すことになるでしょう。毎年一巻ずつで、手始めに第一巻は来年の1月です。(・・・)30万フランになるにちがいないと思います。」¹⁵⁾

捕らぬタヌキの何とかやらをしながら、彼は『ジロンド派の歴史』に取りかかりはじめたのである。仕事場としては所有する城の一つモンソーを選んだ。そこに資料を持ち込み、50年前にさかのぼってフランス革命期のヒーローたちとともに、この一時期を生き始めたのである¹⁶⁾。

以上をまとめると、彼がこの作品を書き始めた動機としては、もちろん政治家としての自己の立場の正当性を歴史的に裏付けたいという意図があったのは間違いないが、それと同時に、借金返済のためにより効果的な文筆活動として、このテーマを選んだという面があったことも否定できないのである。

そもそもからしてこれは売れる作品、多くの人々に喜んで読まれるような、読み易い形のものにならなければならなかった。学術的研究としての歴史書を作ることなど、彼の念頭にはなかったはずである。

以上がこの作品に対するラマルチヌの基本的態度であり、これは作品発表後の批判に対する彼の姿勢を理解するうえでも、忘れてはならない点となる。

以下、1847年の発表までの歩みを眺めてゆく。

III

1843年10月新聞王エミール・ド・ジラルダンに宛てた手紙(日付はない)には、すでに400ページ分の第一巻を書き終ったとあるから、執筆はかなり順調に進んだもようである。最初の巻は10月18日に書き終り、第二巻を12月10日から書き始めているという¹⁷⁾。

11月(同じく日付はない)義弟フランソワ・ド・モンテルロ宛てに、「ロベスピエールにおいては、犯罪は、少なくともその奥に思想を有している。思想は聖なるもので、犯罪は恐ろしいものだった」¹⁸⁾と述べている。ラマルチヌのロベスピエール観は様々な議論を呼ぶものだ

¹⁴⁾ *ibid.*, p. 295

¹⁵⁾ *ibid.*, p. 315

¹⁶⁾ Maurice Toesca, *Lamartine ou l'amour de la vie* (Albin Michel, 1969) p. 386-387

¹⁷⁾ C. IV, p. 330 Croisille の註。

¹⁸⁾ *ibid.*, p. 340

ろうが、この頃からすでに、この革命期最大の人物について調べていたことがうかがえる。

1844年、1月初めのものらしい（これも日付はない）、宛て先もよく分からない手紙には、「私は馬を売りました。パリのアパートマンも又貸しようかと努めています。（・・・）財政上のはなはだしい困難はまったく私の浪費から起きているものではなく（・・・）一族を扶養せねばならない事態から生じたのです」¹⁹⁾という文面がある。相変わらず借金返済に四苦八苦していたらしい。エメ＝マルタンを初め多くの友人から、借金を返すための金を借りたりしている。

もっとも5月14日になると、ヴァランチヌに「私は自分の歴史に、また事業に専念するでしょう！ 事業はうまく行っており、4月中に借金が返済できるだろうと希望しています」²⁰⁾と書く。歴史とはもちろん『ジロンド派』のことだし、事業とは多分ぶどう酒販売や、あるいは前払い金をもらうための『ジロンド派』の出版契約交渉等を指しているのだろう。

11月2日、友人であり代議士として同僚でもあったエドアルド・ラ・グランジュに宛てて、次のように言っている。

「あす、また歴史に取り組み始めます。私は出版社との大取引を結びました。少なくとも60万フランにはなるでしょう。（・・・）10年後には自由になれるです」²¹⁾

自由になれるとは、言うまでもなく借金から、ということである。しかしものごとは思い通りにはいかないものだ。負債からの完全な解放は生涯実現しなかったのだから。

翌1845年3月8日、妹セシル・ド・セシアの長女で、のちにラマルチヌが外に生ませた私生児レオン・ド・ピエルクローと結婚したアリックス・ド・ピエルクロー（つまりラマルチヌの姪にして嫁ということになる）に宛て、「きのう出版社との契約は破棄した。あす訴訟を起こす。勝つでしょう」²²⁾と書いている。『ジロンド派』の出版をめぐるも、様々の問題が生じ、落ちつくところに落ちつくまでには、かなりの曲折があったのである。

3月18日、ラマルチヌは、ノルマンディー古物協会会長レオン・ド・スティコティエールに、資料を送ってもらった件で礼状を出している。彼からはシャルロット・コルディーに関する貴重な情報を得ており、自分の歴史書の中で利用することになる。

5月3日、議会で彼は「信教の自由について」という演説を行なう。その中には次のような言葉がある。

「フランス革命は、その偉大な影全体で考えてみると、なによりも宗教革命だったのです。それゆえに、（・・・）何がおきようと、それは人間精神の歴史における、きわめて重々しい事件ということになるでしょう。フランス革命は自らに2つの使命を与えました。専制政治と貴族政治から市民的普遍的権利を取り戻し、そのことによって市民を解放するという政治的使命。そして国家宗教の神権政治から信教の独立を取り戻すという宗教的使命！ これらの仕事のうち最初のものを革命は果たしました。だからわれわれはそれを維

¹⁹⁾ *ibid.*, p. 391

²⁰⁾ *ibid.*, p. 437

²¹⁾ *ibid.*, p. 477

²²⁾ *ibid.*, p. 520

持するために戦っているのです。しかし第二のものを、革命は果たしたでしょうか？ 否です。だからこそ私は繰り返すのをやめないでしょう。(・・・) フランス革命は終わっていないと。まだ仕事の半分しか果たしていないと。日程の半ばで、休息し、休憩しているだけなのだ。だから革命はまた始まるだろうと。』²³⁾

ここに彼の革命観のもっとも中心的な部分が表明されていると言える。フランス革命は単なる政治革命ではなく、一種の宗教革命でもあるというのだ。その意味では世界観の闘いという側面を持たざるを得ない。古い教権主義的キリスト教から、新しいキリスト教へ、というのが彼の感じていた大筋の方向性だったのだろうが、しかしある面ではキリスト教的世界観そのものを脱却する傾向ももっていたかもしれない(ここでは詳しくは触れない)。いずれにせよ政治家ラマルチーヌとしては、信仰の内的問題に触れることはない。演説後議場で行なわれた質疑応答の中で次のように指摘するだけである。

「信教の自由の中にしか平和はないということを良く知っておいてください。教会を国家に結び付けておく絆を体系的にかつ幅広く緩めていく中にしか、両者を段階的かつ持続的に切り離していく中にしか、平和はないのです。』²⁴⁾

政教分離という近代社会のあり方を説いているのである。人々が平和に暮らすためには、宗教的原理の枠を超え、神と悪魔の対立という視点をすて、互いを人間として認めあう以外にないということだろう。

1845年当時、フランス社会は、まだ完全には宗教的呪縛から脱していないと彼の眼には映っていた。それゆえ革命はいまだ未完成であると言わざるをえない。革命はまた始まるだろうというその言葉には、一種予言的響きが認められる。

この演説の直後5月6日、ヴァランチーヌにこのときの様子を伝えている。「議会は一言言うごとに、うねる波のように私に向かって押しよせてきました。(・・・) 皆が私の思想に対し敵対していたのです。』²⁵⁾

7月6日エメ＝マルタンへ。「毎朝5ページから6ページ書いています。(・・・) 私ほどロベスピエールを研究した者はいなかったろう。彼は大悪党でなかったとしたら、最大の政治家となるでしょう。』²⁶⁾

革命史(それがいかに学問的歴史研究から離れていようと)を執筆することと、上記議会演説に見られるような革命観を確立していくこととは、じつに密接に関連していたと感じられるではないか。

1846年になると、2月5日ヴァランチーヌにあてて、前日パリから10里ほど離れた町に、85歳になる老司祭を訪ねたと知らせている。その司祭はジロンド派の人々その他が処刑される前夜、神の救済を伝えるために彼らのもとにおもむいた司祭だという。何人かの若者のケースでは、ギロチンの場所にまでつきそっていった人だともいう。

²³⁾ Lamartine, *La France parlementaire*, Tome IV (Lacroix, 1865), p. 161

²⁴⁾ *ibid.*, p. 169

²⁵⁾ C. IV, p. 538-539

²⁶⁾ *ibid.*, p. 557

ラマルチーヌはこの老人から、彼らの死の前後の様子を詳しく聞き、その真偽を確かめることもなく、貴重な直接的証言として『ジロンド派』の中で使ったらしい。しかしこの老人大分もうろくし、記憶違いが多かったとも言われている。

同年6月（日付はない）、アリックス・ド・ピエルクローへ「現代は偉大なことは何一つ試みないのです。自らの衰弱を感じています（・・・）それは1789年の勇気の反動でしょう（・・・）私は『ジロンド派』の中で、現代に向かってではなく未来に向かって語りかけるつもりです」²⁷⁾と言っている。この歴史書が、過去を見すえて未来に備えようという基本姿勢に貫かれて書かれたものであることを、何よりも示す言葉である。

12月24日、郷里マコンでの有力な支持者の一人、エドワール・デュボワに、「今週『ジロンド派』を書き終えます」²⁸⁾と知らせる。

IV

ついに1847年3月17日、『ジロンド派の歴史』の最初の2巻がフェルヌ・エ・コクベール社から発刊される。その2日前の15日、ラマルチーヌがマコンにおける有力な支持者の一人ルイ＝マリ＝イレール・ロノに宛てた手紙には、いよいよあさってこの書が出ることになっているが、「じっさいのところ、2日前から18もの新聞に抜粋が載っています。幸いなことに大変な好評です」²⁹⁾という文面がある。出版直前から注目を集めていたのである。売行きも大変なもので、発売後2日間で6千部を売り上げ、2ヵ月後の5月15日には、さらに1万2千部が売り切れ、新しい版を刷らねばならなかったという³⁰⁾。当時のフランスの総人口はおよそ3千5百万余だったはずだが、識字率を考慮すれば読書人口はせいぜい数百万人だったろうから、この売り上げ部数は相当のものと言わざるをえない。

この年には2月6日にルイ・ブランの『革命史』、同10日にはミシュレの『フランス革命史』の、それぞれの第一巻が発売されており、時代の風潮として、現在の社会体制の出発点を刻んだといえる50年余り前の出来事を、再評価しようという動きがあったのは確かである。

これらの革命史の中で、ラマルチーヌのそれが最も売れたことも確かなのである。それゆえ反響は大きかったらしい。ラマルチーヌ讚美といったものもあるが、それ以上目立つのは資料を提供した人々からの批判である。

3月17日、発売当日、すでにそれ以前新聞で読んでの反応だろう。フィリップ・ルバなる人物から次のような手紙が来る。

「あなたが、印刷所に原稿をお渡しになる前に、わたくしどもに関係するページを見せる方がよいと御判断下さらなかったことを、たいそう残念に思います。（・・・）わたしの叔母はまだ生きておまして、名前はソフィーではなくアンリエットといます。あなたが彼女についてお書きになっていることは胸を痛めずには読めないでしょう。彼女はあんなふうな軽薄で軽はずみな性格ではないからです。」³¹⁾

²⁷⁾ *ibid.*, p. 664

²⁸⁾ *ibid.*, p. 710

²⁹⁾ *Coresspondance*, Tome V [以下 C. V と略す], p. 38

³⁰⁾ Antoine Court, *Les Girondins de Lamartine*, Tome 2 (Roure, 1990), p. 91

³¹⁾ C. V, p. 44

手紙の主はロベスピエールが投宿していた宿の末娘を母として持つ男性で、彼の母がラマルチーヌに多くの資料を提供してくれていたのである。が、いつものことながらと言ってよいだろうか、細部の正確さなどにはほとんど配慮せず彼は筆を進めてしまったらしい。

このたぐいの抗議は他にも何通か来ている。が、もしかしたらラマルチーヌにとってそれ以上に重要と思われたのは、政治的立場の相違を改めて確認し、心を痛めたと知らせてくるような親友ないし旧知の人々からの手紙だったかもしれない。

4月4日ソルボンヌの歴史教授で、自身にも『革命史概要』等があって、ラマルチーヌとは家族ぐるみの付き合いを続けていたシャルル・ド・ラクテルが、「まだはっきりとはしないやり方ですが、この偉大な作品を飾るにちがいない政治的答えだけは分かります。それが、私がつらい体験から導いてきた答えと完全には一致しないことを恐れてさえいます」³²⁾と書いてよこす。

ラクテルは最初大革命初期の出来事には好意を感じていたが、最終段階の出来事（ロベスピエール等による恐怖政治）には共感を抱いていなかった。そこでラマルチーヌの書が、あまりにも人気を博し社会的影響力をふるいそうな様子を見て、革命のかかげた民主主義の理念を復活させる働きをもつことは是としながらも、現在維持されている秩序と社会的安定をおびやかすことになるのではないかと、むしろ革命を再びよびよせかねないような危険を犯すことにならないかと、危惧したのである。

この危惧は根拠のないものではなかったはずだ。現在の「システム」を擁護する保守派の面々は口をきわめて『ジロンド派』を非難するだろう。新聞等に公開書簡の形で載ったそうした抗議はいくつもあり、その一つ一つにラマルチーヌは誠実に返答しようとはしている。ただし個人的に寄せられた書簡には、あからさまな非難ではなく「残念だ」とか「悲しく思う」と言うものが大半である。それらは、ラマルチーヌがかつて正統王党派として活躍していたことから、43年以降反対派に移っても、まだ7月王制には反対しても正統ブルボン王朝の復権は支持していると信じていた人々の、期待ないし幻想が打ち砕かれた衝撃を伝えるものだ（代表的なのは5月21日のアンリ＝オーギュスト・ド・ラ・ロシュジャクランからの書簡）。

一方社会変革を願っていた民主派、革命派の人々からは歓迎の言葉が次々と寄せられる。4月6日有名な詩人ベランジェから次のような書簡が届く。

「これこそ生きた歴史、ミシュレが正当にも言っている復活です。（・・・）何という雄弁さで、また何と靈感あふれた豊かな文体で、あなたはわれらが聖なる革命の原理を擁護なさっていることか！われらの父たちが人類[＝人間性]の大義のためになした、すべての利益に沿うこうした弁護の中には、何というパトリオティズムがあることか！」³³⁾

国民を愛するゆえに、かつての革命の栄光を思い出そうとしてこの書は書かれたとベランジェは言いたげである。政治家としてラマルチーヌは、ただいま現在の国のあり方を憂え、それゆえに向うべき正しい方向を、もう一度過去にさかのぼって考え直そうとしていたと思われたのだろう。つまり、過去を振り返るのは未来を切り拓くためになのだ、と。

民主派、革命派と言われる人々の期待は、そのような認識のもとに、いやましていくだろう。

³²⁾ *ibid.*, p. 55

³³⁾ *ibid.*, p. 58

フランス大革命の原理ないし理想を今によみがえらせ、不十分な民主的システムをより完全なものに近づける役割こそ、ラマルチーヌに託そうではないかと。

6月12日、『ジロンド派の歴史』の後半の2巻が発売され、全巻完結する。

2週間後、リヨンの牧師でラマルチーヌへ財政的援助をしていたジェゼフ・マルタン＝パシュから「ルイ＝フィリップに代って、わたしはあなたに、フランスの統治を直ちに行なってもらいたいと言いたいくらいです」³⁴⁾という言葉が送られてくる。これが当時の民主派陣営の典型的な感想だっただろう。

7月18日マコンで『ジロンド派の歴史』の著者へ供される歓迎宴会なるものが催される。反政府の立場に立つ政治家の決起集会のようになることを恐れて、あえてラマルチーヌが、自分の出版を祝う会の形をとってほしいと申し入れたものだという。

7月10日土曜日、まだパリに残っていたと思われる妻マリアンヌへマコンから書いている。

「わたしはまったく孤独で一人です。犬たちと一緒にね。ただ夕方になると大勢の人が訪ねてきます。マコンの人々はわたしたちにはすばらしい人々です。夜、私の窓の下でセレナーデを奏してくれるのです。そして木曜には花火と、テラスでの軽食パーティがありました。」³⁵⁾

まさに故郷に錦を飾って、くつろいでいる様子である。しかし彼には文筆活動での成功に酔いしれているような余裕は、さほど残されていないだろう。

翌11日、かつて穏健派の野党議員としてラマルチーヌとかなり近い立場にいたアルコックから次のような言葉が届く。

「現下の危機は大きなもの、果てしないものです。現在の一種の意気消沈、モラルの溶解が、社会のすみずみにまでしみ込み、その生の原理を変質させています。(・・・) あれら唾棄すべき人々は、自分たちの権力への渇きをみたすために、もっとも高貴だったもの、この世にあってもっとも誇れるもの、フランス的な性質と精神を、フランスという偉大な名誉の誉れを、恐れることなくおとしめてしまいました。(・・・) 今日なすべきさらに大きな仕事があります。そしてあなた以上に、この仕事をなすにふさわしい人は誰もいません。(・・・) あなたは先頭に立って歩いて下さるでしょう。あなたの諸作品は、われわれの戦いのおたけび、指令の言葉、結集を告げる言葉なのです。」³⁶⁾ (下線部強調は原文による)

7月18日、マコンで行なわれた歓迎宴会(バンケ)で、ラマルチーヌは次のような演説をする。

「私の本は一つの結びを必要としていました。そしてその結びを作り出すのはあなた方です！ 結びとなるもの、それは革命は自らの革命の精神を学ぶ必要を、そして純化され

³⁴⁾ *ibid.*, p. 106

³⁵⁾ *ibid.*, p. 115

³⁶⁾ *ibid.*, p. 119-121

たその原理原則にもう一度立ち戻る必要を、突如感じているということです。革命の原則をゆがめてしまった行き過ぎから、汚してしまった血から決別する必要を、また自らの過去から自らの現在と未来の教訓をくみとる必要を、感じているのです。そうです、半世紀へたあと、事件のまだ熱い灰の下に、最初のひらめきを探すこと（・・・）これがこの本の思想なのです！』³⁷⁾

ロベスピエールが、あの恐怖政治の第一の責任者ではないというラマルチヌの見方の当否はともかく、恐怖政治が血まみれの誤り、逸脱、行き過ぎであったことは間違いない。こうした過ちから決別し、本来革命がめざしたものを現実によりみえらせること、それが彼の目差す目標だと言っているのだ。

単なる詩人、文筆家としてだったら、そのような主張を書物の中でなし、社会的影響力を發揮できればこと足りるとするだろう。だが政治家としては、それだけで良いのか。マルタン＝パシュやアルコックのように、彼に現実での行動を期待する人々がふえていくとき、恐らくは思いもかけない役割を担わされることにもなろう。ただ議会では終始独立派として、一匹狼的に過ごしているラマルチヌにこの時期、しのびよってくる2月革命での自らの役割は、まだほとんど見えていなかったに違いない。

*

以上『ジロンド派の歴史』の成立までの歩みと、発表直後の反響について眺めてきた。最初にも述べたように、これは学術的な歴史書ではない（考えてみれば当時、今日でいう歴史学はまだ学問として成立してはいなかった）。ラマルチヌが自らの財政的困難を少しでも打開しようと、売れる本を書こうと思い、もう一方では政治家としての立場から、自己の主張を裏づけ強化しようというもくろみもあって、このテーマでこれを書いたといえる。

こうしたいわば不純な意図（？）とは無関係に、もたらされた結果は重大かつ深刻なものとなった。1847年当時のフランス社会の閉塞感（不作とか不況といった背景もあった）から、過去をふりかえって今を考え直そうといった動きが、いわば自然発生的に生じていたのだろうが、ブランやミシュレの革命史以上に、ラマルチヌのこの本は大きな反響をもたらし、フランス社会がおそらくは潜在的に求めていた、未来への突破口を明示するような働きを担うこととなったのである。それはこの本が、他の誰よりも名声ある著者によって書かれたというだけではなく、「こんなのは歴史ではない、小説だ」といわれるくらい読みやすく面白い作品となっていたという面によるのかもしれない。それゆえあまりに大きな反響をかんがみると、はたしてこの本なくして、翌年2月の革命はあったであろうか？ とさえ自問したくなるではないか。また現に、2月革命によってひどい思いをさせられた保守派の面々は、その後長く、ラマルチヌがこの書を書いたから新たな革命が起きたのだと、恨み言を言っていたのも事実だ。つまりこの『ジロンド派の歴史』出版は、一つの事件だったと言えるのである。この書は今日考えられるような意味での歴史書ではなかった。しかしまちがいに歴史を動かした歴史的書物だったのである。

(中央大学経済学部教授)

³⁷⁾ P. H., p. 306-307